

# 障害児の教育的リハビリテーションとその家族のストレスとの関係及びストレスの規定要因に関する研究

橋本厚生

はじめに

(1)(2)  
前回の報告に引続き、障害児・者を持つ家族の種々なストレスの規定要因に関する分析を行う。また、今回は、障害児・者の教育的リハビリテーションの効果とストレスの関係も分析してみる。規定要因に関する1回目の分析は、残りの要因、「社会的地位」と「兄弟ストレス」以外はすでに終えているので、今回はその残りの二要因の1回目の分析を行う。そして、2回目の分析も、全ての要因に対して本報告で行われる。2回目の分析とは、要因「間」の分析を中心に、1回目の「量的」差異と違った「質的」差異を検討することである。

## I 目的

1. 規定要因の「社会的地位」の高、低は障害児・者のいる家族の各種ストレスを規定しているか
2. 障害児・者がいることで種々なストレスを受けている兄弟のそのストレスの高・低は、その家族の各種ストレスを規定しているか
3. 各種ストレスの高・低は、障害児・者の教育的リハビリテーションに影響を与えているか
4. 12個の規定要因は相互に独立しているか、つまり、各々、重複せずにストレスを規定していると言えるか。及び各要因は各ストレスをどの程度、どんな順位で、「質的」に説明しているか

以上を主な目的とする。

## II 方法

### (1) 手続 スコアリング 対象者

(1)  
第一回の報告を参照されたい。但し、「教育的リハビリテーションの効果」については以下のように評価した。障害児・者を担当している養護学校の教師に、1. 学力、2. 身辺処理能力、3. 社会性、等について、「良い」から「おこなっている」まで5段階で評価させた。評価基準は、正常児や学級内との比較ではなくて、「この子の障害の程度から考えて」である。つまり、教育的リハビリテーションの効果は、できるだけ障害の重症度の影響を取り除き、できるだけ家族の状況の影響によって分析するためである。

## III 分析と結果

### (1) 社会的地位

(1)  
前回の報告で示したように、社会的地位の高・低によるストレスの差異は、初期に顕著に現われるため、今回は、前期（小学部）と後期（中等部と高等部）に分けて各ストレス因子の相違を見た。その結果は Table 1（初期）と Table 2（後期）である。Table 2では、7個のストレスいずれに対しても平均値の差（t検定）は認められない。Table 1では、「外部対人ストレス」について、有意差は認められないが、やや傾向が認められる（ $t = -1.20, P < 0.240$ ）。また、Table 1の方に有意水準がやや高くなるストレスが多い。つまり、社会的地位の高い家族は、低い家族よりも高いストレスを示す傾向にあり、特にそれは初期においてよく現われる。しかし、この分析では、統計的に明確な差を示しているとは言えない。ただし、この後行う「質的」な分析では注目すべき結果が得られている。

Table 1 初期の社会的地位の高・低グループ間の各ストレス得点のt検定 (\*印はWelch 法による)

ストレス因子	グループ 上段：低 下段：高	N	M	S.D	誤差	F値	F 値 有意水準	t 値	D.F	t 値 有意水準
心理 ストレス	GROUP 1	40	4.9500	2.287	0.362	1.04	0.919	-0.33	68	0.739
	GROUP 2	30	5.1333	2.240	0.409					
内部役割 ストレス	GROUP 1	40	7.6750	2.759	0.436	1.57	0.189	0.82	68	0.415
	GROUP 2	30	7.0667	3.453	0.631					
外部活動 ストレス	GROUP 1	40	1.2750	1.783	0.283	1.79	0.106	-0.49	68	0.623
	GROUP 2	30	1.4667	1.332	0.243					
外部対人 ストレス	GROUP 1	40	1.7250	2.195	0.347	7.08	0.000	-1.20	35.17	0.240 *
	GROUP 2	30	3.0667	5.842	1.067					
経済 ストレス	GROUP 1	40	0.5500	0.783	0.124	1.17	0.668	0.82	68	0.416
	GROUP 2	30	0.4000	0.724	0.132					
総合 ストレス	GROUP 1	40	0.0750	1.347	0.213	1.26	0.499	-0.27	68	0.790
	GROUP 2	30	1.1667	1.510	0.276					
合計 ストレス	GROUP 1	40	17.3500	7.604	1.202	1.06	0.854	-0.13	68	0.893
	GROUP 2	30	17.6000	7.828	1.429					

Table 2 後期の社会的地位の高・低グループ間の各ストレス得点のt検定

ストレス因子	グループ 上段：低 下段：高	N	M	S.D	誤差	F値	F 値 有意水準	t 値	D.F	t 値 有意水準
心理 ストレス	GROUP 1	11	6.1818	3.027	0.913	1.24	0.771	0.05	18	0.957
	GROUP 2	9	6.1111	2.713	0.904					
内部役割 ストレス	GROUP 1	11	7.9091	3.177	0.958	1.12	0.888	-0.07	18	0.949
	GROUP 2	9	8.0000	3.000	1.000					
外部活動 ストレス	GROUP 1	11	1.5455	1.695	0.511	1.04	0.930	-1.02	18	0.319
	GROUP 2	9	2.3333	1.732	0.577					
外部対人 ストレス	GROUP 1	11	2.9091	2.300	0.694	1.85	0.395	0.02	18	0.983
	GROUP 2	9	2.8889	1.691	0.564					
経済 ストレス	GROUP 1	11	0.7273	0.786	0.237	1.62	0.468	-0.68	18	0.503
	GROUP 2	9	1.0000	1.000	0.333					
総合 ストレス	GROUP 1	11	1.0000	1.183	0.357	1.33	0.660	0.20	18	0.847
	GROUP 2	9	0.8889	1.364	0.455					
合計 ストレス	GROUP 1	11	20.2727	8.162	2.461	1.31	0.714	-0.37	18	0.716
	GROUP 2	9	21.5556	7.126	2.375					

## (2) 兄弟ストレス

兄弟ストレスとは、障害児・者が家族にいてことで直接、間接影響をこうむる兄弟のストレスである。もちろんストレスをこうむるところかより有意義な影響をこうむる場合もあるが、ここでは良い影響、ストレスがない場合、兄弟がいない場合、そしてほとんどストレスがない場合をひとつのグループ（「その他のグループ」）として、もうひとつのグループを高いストレスをこうむっているグループとして、この2グループ間で7個のストレスの差異を見た。つまり、障害児・者に関する種々な問題のために不利な影響をこうむっている兄弟がいることは、他の家族ストレスを直接、間接増大させているかどうかを検討した。Fig. 1はその結果を示し、Table 3はその統計的検定の結果を示している。一見して分かるように、全てのストレスに関して、両グループ間に大きな差を示している。t値の有意水準は全て高水準で、兄弟ストレスの高い家族が高い家族ストレスを示すことを保証している。

Fig. 1 兄弟ストレスの高いグループとその他のグループ間のストレスの差異

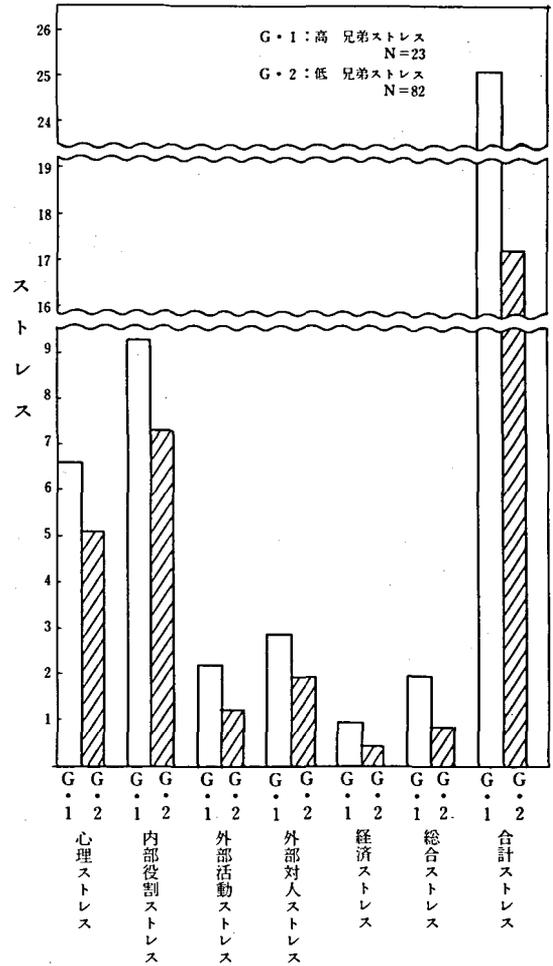


Table 3 Fig. 1 のt検定の結果 (\*印はwelch法による)

ストレス因子	グループ	N	M	S.D	誤差	F値	F値有意水準	t値	D.F	t値有意水準
心理ストレス	GROUP 1	23	6.6957	2.530	0.528	1.04	0.855	2.64	103	0.010
	GROUP 2	82	5.1463	2.480	0.274					
内部役割ストレス	GROUP 1	23	9.3478	3.214	0.670	1.20	0.544	2.79	103	0.006
	GROUP 2	82	7.3780	2.934	0.324					
外部活動ストレス	GROUP 1	23	2.2174	1.757	0.366	1.55	0.160	2.63	103	0.010
	GROUP 2	82	1.2927	1.410	0.156					
外部対人ストレス	GROUP 1	23	2.9130	2.043	0.426	1.18	0.583	2.23	103	0.028
	GROUP 2	82	1.9024	1.883	0.208					
経済ストレス	GROUP 1	23	0.9130	0.900	0.188	1.41	0.266	2.41	103	0.018
	GROUP 2	82	0.4634	0.757	0.084					
総合ストレス	GROUP 1	23	2.0000	1.883	0.393	1.87	0.046	2.49	28.93	0.019
	GROUP 2	82	0.9512	1.378	0.152					
合計ストレス	GROUP 1	23	25.1304	9.057	1.888	2.07	0.020	3.92	28.23	0.001*
	GROUP 2	82	17.2317	6.300	0.696					

### (3) 12個の規定要因とストレス因子との質的な分析

今までの分析では、各規定要因によって分類された2グループ間で、そのストレス得点の量的な差をt検定で検討してきた。ここでは、同じ規定要因とストレス因子について、質的な差異もしくは関係を重回帰分析で検討してみた。12個の規定要因とは、「親類の援助」、「夫の理解」、「家族の結束度」、「夫婦の価値観一致」、「免疫性」、「母の性格」、「両親の平均年齢」、「家族規模」、「兄弟ストレス」、「社会的地位」、「障害者の学年」の12個である。結果は、Table 4からTable 10に示されている。Table 4では、「心理ストレス」を最もよく説明しているのは「兄弟ストレス」であり、そのBETA値(標準回帰係数)は、0.19951である。次いで「母の性格」となり、以下「免疫性」、「家族規模」、「重症度」、「社会的地位」などとなっている。単純相関(Simple R)との符号(+/-)もよく一致している。ただ、ダービンワトソン検定比が2.21730で2を超えているのが少し気になるが、残差はランダムと見てよいであろう。同様に、Table 5の「内部役割ストレス」では、「親類の援助」が他を圧して高いBETA値を示し、「重症度」、「社会的地位」、「家族の結束度」、「夫の理解」などが順に現われる。符号も一致し、検定比も残差が偏っていないことを示している。Table 6では、「両親の平均年齢」、「母の性格」、「親類の援助」、「家族の結束度」、「免疫性」の順に現われ、Table 7では、「家族の結束度」、「夫婦の価値観一致」、「社会的地位」などが高い。Table 8では、「夫の理解」、「家族の結束度」、「社会的地位」などが高いが、検定比が1.47696で残差の状態が良くない。Table 9は、「総合ストレス」であるが、前回は報告したように、このストレスは家族の「危機状態」を最もよく現わしている。「家族の結束度」がとびぬけて高いBETA値を示している。全てのストレスを合計した「合計ストレス」については、Table 10が示すように、「家族の結束度」、「母の性格」、「親類の援助」、「社会的地位」、「夫婦の価値観一致」、「免疫性」、「兄弟ストレス」、「重症度」、「夫の理解」、「家族規模」、「両親の平均年齢」、「障害者の学年」の順で説明している。

さて、これら12個の規定要因の相互関係であるが、Table 11はこれらの相互の単純相関係数を示している。太字で示した係数は、他の係数よりもやや高いことを意味している。「夫の理解」と「家族の結束度」、「夫の理解」と「母の性格」がそれぞれ0.31261と0.31621であり、また、「両親の平均年齢」と「障害者の学年」では0.53636となっている。

12個の規定要因の各ストレスに占める順位を一覧表にしたのがTable 12である。「合計ストレス」における順位がおよそ総体としての順位を表わしているが、この順位が低い要因でもストレスの種類によっては高い順位を示している場合もあるので注意すべきである。例えば、「夫の理解」は「合計ストレス」では9位だが、「経済ストレス」では1位となり、「両親の平均年齢」は、「合計ストレス」では11位だが、「外部対人ストレス」と「総合ストレス」では高い順位を示している。概して言えば、「家族の結束度」、「母の性格」、「親類の援助」、「社会的地位」、「夫婦の価値観一致」、「免疫性」が規定要因として良い指標となっている。

Table 4 心理ストレスに対する各規定要因の重回帰分析の結果

規定要因	MULTIPLE R	R SQUARE	RSQ CHANGE	SIMPLE R	B	BETA
親類の援助	0.02767	0.00077	0.00077	-0.02767	0.2291546	0.04158
夫の理解	0.04737	0.00224	0.00148	0.03513	0.3080525	0.06090
家族の結束度	0.09786	0.00958	0.00733	-0.07070	-0.1976438	-0.09109
夫婦の価値観一致	0.13076	0.01710	0.00752	0.07569	0.4279040 D-01	0.02603
免疫性	0.19127	0.03659	0.01949	0.15281	0.3744659	0.13848
母の性格	0.22428	0.05030	0.01372	-0.12166	-0.3437182	-0.17505
両親の平均年齢	0.22572	0.05095	0.00065	0.01562	-0.1401978	-0.06520
家族規模	0.25709	0.06610	0.01515	0.12051	0.5354438	0.10585
兄弟ストレス	0.31706	0.10053	0.03443	0.18988	1.323262	0.19951
重症度	0.33504	0.11225	0.01172	-0.11989	-0.4947360	-0.10227
社会的地位	0.34610	0.11979	0.00753	-0.02931	-0.3719485	-0.10031
障害者の学年	0.35496	0.12600	0.00621	0.07567	0.1417295	0.09624

ダービン-ワトソン検定比 = 2.21730

Table 5 内部役割ストレスに対する各規定要因の重回帰分析の結果

規定要因	MULTIPLE R	R SQUARE	RSQ CHANG	SIMPLE R	B	BETA
親類の援助	0.29199	0.08526	0.08526	-0.29199	-1.904218	-0.27410
夫の理解	0.34745	0.12072	0.03546	-0.21966	-0.8824401	-0.13838
家族の結束度	0.39073	0.15267	0.03195	-0.24140	-0.4277060	-0.15637
夫婦の価値観一致	0.39233	0.15392	0.00125	-0.03076	0.4502021 D-01	0.02173
免疫性	0.39692	0.15755	0.00362	0.05390	0.3508395	0.10292
母の性格	0.40516	0.16415	0.00660	-0.18470	-0.1639636	-0.06624
両親の平均年齢	0.40639	0.16515	0.00100	0.05401	-0.4925047 D-01	-0.01817
家族規模	0.40776	0.16627	0.00111	-0.03498	0.1339972 D-01	0.00210
兄弟ストレス	0.42146	0.17763	0.01136	-0.05598	-0.6749539	-0.08073
重症度	0.44942	0.20198	0.02435	0.23122	1.199334	0.19667
社会的地位	0.47558	0.22617	0.02420	-0.08786	-0.7545172	-0.16142
障害者の学年	0.48185	0.23218	0.00601	-0.03984	-0.1757523	-0.09467

ダービン-ワトソン検定比 = 1.93497

Table 6 外部活動ストレスに対する各規定要因の重回帰分析の結果

規定要因	MULTIPLE R	R SQUARE	RSQ CHANG	SIMPLE R	B	BETA
親類の援助	0.25163	0.06332	0.06332	-0.25163	-0.6351908	-0.17093
夫の理解	0.30809	0.09492	0.03160	-0.20469	-0.2209789	-0.06478
家族の結束度	0.34787	0.12101	0.02609	-0.21994	-0.1888031	-0.12904
夫婦の価値観一致	0.36354	0.13216	0.01115	0.10943	0.1154430	0.10415
免疫性	0.38089	0.14508	0.01292	0.10633	0.2052884	0.11259
母の性格	0.41286	0.17045	0.02538	-0.27001	-0.2353312	-0.17774
両親の平均年齢	0.44391	0.19706	0.02660	0.23314	0.2956886	0.20395
家族規模	0.46298	0.21435	0.01729	-0.14153	-0.4019053	-0.11782
兄弟ストレス	0.46788	0.21891	0.00456	0.10760	0.3551519	0.07941
重症度	0.47257	0.22333	0.00442	0.15328	0.2598117	0.07965
社会的地位	0.47454	0.22519	0.00187	0.03901	-0.9809689 D-01	-0.03923
障害者の学年	0.48268	0.23298	0.00779	0.06015	-0.1069960	-0.10775

ダービン-ワトソン検定比 = 1.88299

Table 7 外部対人ストレスに対する各規定要因の重回帰分析の結果

規定要因	MULTIPLE R	R SQUARE	RSQ CHANGE	SIMPLE R	B	BETA
親類の援助	0.03387	0.00115	0.00115	-0.03387	-0.4769103	-0.05494
夫の理解	0.07053	0.00498	0.00383	-0.06526	0.2137318	0.02683
家族の結束度	0.24953	0.06227	0.05729	-0.24804	-0.8159375	-0.23875
夫婦の価値観一致	0.32869	0.10804	0.04577	0.21882	0.5491054	0.21208
免疫性	0.34066	0.11605	0.00802	0.10025	0.3445753	0.08090
母の性格	0.34582	0.11959	0.00354	-0.02557	0.2592961	0.08384
両親の平均年齢	0.34619	0.11985	0.00025	0.01855	-0.9721632 D-01	-0.02871
家族規模	0.35907	0.12893	0.00903	-0.04591	0.8794366	-0.11038
兄弟ストレス	0.37008	0.13696	0.00803	0.12200	0.7541404	0.07219
重症度	0.37010	0.13698	0.00002	0.00787	-0.2004806	-0.02631
社会的地位	0.39077	0.15270	0.01573	0.20855	0.7788474	0.13336
障害者の学年	0.39151	0.15328	0.00058	0.02152	0.6826742 D-01	0.02943

ダービン-ワトソン検定比 = 1.88492

Table 8 経済ストレスに対する各規定要因の重回帰分析の結果

規定要因	MULTIPLE R	R SQUARE	RSQ CHANGE	SIMPLE R	B	BETA
親類の援助	0.03119	0.00097	0.00097	-0.03119	0.5768320 D-01	0.03187
夫の理解	0.17224	0.02967	0.02869	0.16486	0.4239269	0.25515
家族の結束度	0.25819	0.06666	0.03699	-0.13169	-0.1646147	-0.23098
夫婦の価値観一致	0.27079	0.07333	0.00667	0.04780	0.3768350 D-01	0.06980
免疫性	0.28551	0.08152	0.00819	0.13668	0.6353586 D-01	0.07154
母の性格	0.28940	0.08375	0.00224	-0.02682	-0.5972089 D-01	-0.09260
両親の平均年齢	0.33119	0.10969	0.02593	0.15022	0.8721113 D-01	0.12349
家族規模	0.33119	0.10969	0.00000	0.01283	-0.1107954 D-01	-0.00667
兄弟ストレス	0.34312	0.11773	0.00804	0.11390	0.2416272	0.11092
重症度	0.34878	0.12165	0.00392	-0.03776	-0.6816200 D-01	-0.04290
社会的地位	0.37671	0.14191	0.02026	-0.10999	-0.1933293	-0.15874
障害者の学年	0.38153	0.14556	0.00365	0.11237	0.3570085 D-01	0.07381

ダービン-ワトソン検定比 = 1.47696

Table 9 総合ストレスに対する各規定要因の重回帰分析の結果

規定要因	MULTIPLE R	R SQUARE	RSQ CHANGE	SIMPLE R	B	BETA
親類の援助	0.17254	0.02977	0.02977	-0.17254	-0.5982146	-0.19186
夫の理解	0.18908	0.03575	0.00598	-0.09609	0.2512451 D-01	0.00878
家族の結束度	0.33766	0.11401	0.07826	-0.29754	-0.4319716	-0.35188
夫婦の価値観一致	0.35636	0.12699	0.01298	0.10920	0.8237521 D-01	0.08858
免疫性	0.36410	0.13257	0.00557	0.09180	0.1109537	0.07253
母の性格	0.39024	0.15229	0.01972	-0.22171	-0.2124721	-0.19127
両親の平均年齢	0.45952	0.21116	0.05888	-0.18692	-0.2729931	-0.22442
家族規模	0.46183	0.21329	0.00213	0.07890	0.1062697	0.03713
兄弟ストレス	0.46214	0.21357	0.00028	0.02455	0.2959283 D-01	0.00789
重症度	0.51859	0.26894	0.05537	-0.17904	-0.6070836	-0.22182
社会的地位	0.55319	0.30602	0.03708	-0.11231	-0.4328419	-0.20633
障害者の学年	0.55350	0.30637	0.00035	-0.11952	-0.1892548 D-01	-0.02271

ダービン-ワトソン検定比 = 1.79499

Table 10 合計ストレスに対する各規定要因の重回帰分析の結果

規定要因	MULTIPLE R	R SQUARE	RSQ CHANGE	SIMPLE R	B	BETA
親類の援助	0.25958	0.06738	0.06738	-0.25958	-3.293241	-0.18731
夫の理解	0.30790	0.09480	0.02742	-0.19348	-0.6643896	-0.04117
家族の結束度	0.39424	0.15543	0.06063	-0.29698	-1.690465	-0.24420
夫婦の価値観一致	0.41040	0.16843	0.01300	-0.11541	0.5197627	0.09911
免疫性	0.41762	0.17441	0.00598	0.08028	0.8039089	0.09319
母の性格	0.46124	0.21274	0.03833	-0.30994	-1.434468	-0.22900
両親の平均年齢	0.46131	0.21281	0.00007	0.07813	-0.8668590 D-01	-0.01264
家族規模	0.46139	0.21289	0.00008	0.01359	0.2607687	0.01616
兄弟ストレス	0.46634	0.21747	0.00459	0.11575	1.931857	0.09130
重症度	0.46668	0.21779	0.00032	0.10335	0.6858989	0.04444
社会的地位	0.48795	0.23810	0.02031	-0.02692	-1.828266	-0.15455
障害者の学年	0.48803	0.23817	0.00007	0.05875	0.4904533 D-01	0.01044

ダービンワトソン検定比 = 1.76232

Table 11 合計ストレス及び各規定要因の相関マトリクス

	合計 ストレス	親類の援助	夫の理解	家族の 結 束 度	夫婦の価値 観 一 致	免 疫 性	母の性格
合計ストレス	0.00000	-0.25958	-0.19348	-0.29698	0.11541	0.08028	-0.30994
親類の援助	-0.25958	1.00000	0.11139	0.04573	0.10820	-0.04808	0.15490
夫の理解	-0.19348	0.11139	1.00000	<b>0.31261</b>	-0.16647	0.17039	<b>0.31621</b>
家族の結束度	-0.29698	0.04573	<b>0.31261</b>	1.00000	-0.05937	-0.02495	0.17842
夫婦の価値観一致	0.11541	0.10820	-0.16647	-0.05937	1.00000	-0.02555	-0.20964
免疫性	0.08028	-0.04808	0.17039	-0.02495	-0.02555	1.00000	0.04538
母の性格	-0.30994	0.15490	<b>0.31621</b>	0.17842	-0.20964	0.04538	1.00000
両親の平均年齢	0.07813	-0.23343	-0.12874	-0.03569	0.02432	0.09342	0.00902
家族規模	0.01359	-0.00417	0.03335	-0.08044	0.10251	-0.03887	0.08489
兄弟ストレス	0.11575	-0.18118	0.01147	-0.06396	0.04007	0.00077	0.03617
重症度	0.10333	-0.06266	-0.13071	-0.23997	-0.12403	-0.15651	-0.17250
社会的地位	-0.02692	0.05589	-0.13787	-0.22141	0.19821	0.00043	-0.16178
障害者の学年	0.05875	-0.21138	-0.07529	0.08186	0.06926	0.06628	-0.06611

	両親の平均 年 令	家族規模	兄弟ストレス	重 症 度	社会的地位	障害者の学年
合計ストレス	0.07813	0.01359	0.11575	0.10335	-0.02692	0.05875
親類の援助	-0.23343	-0.00417	-0.18118	-0.06266	0.05589	-0.21138
夫の理解	-0.12874	0.03335	0.01147	-0.13071	-0.13787	-0.07529
家族の結束度	-0.03569	-0.08044	-0.06396	-0.23997	-0.22141	0.08186
夫婦の価値観一致	0.02432	0.10251	0.04007	-0.12403	0.19821	0.06926
免疫性	0.09342	-0.03887	0.00077	-0.15651	0.00043	0.06628
母の性格	0.00902	0.08489	0.03617	-0.17250	-0.16178	-0.06611
両親の平均年齢	1.00000	-0.05949	0.05911	0.10889	-0.05894	<b>0.53635</b>
家族規模	-0.05949	1.00000	0.05305	-0.10457	0.06573	0.04664
兄弟ストレス	0.05911	0.05305	1.00000	-0.01371	0.13347	0.07054
重症度	0.10889	-0.10457	-0.01371	1.00000	0.16480	0.03349
社会的地位	-0.05894	0.06573	0.13347	0.16480	1.00000	0.02893
障害者の学年	<b>0.53635</b>	0.04664	0.07054	0.03349	0.02893	1.00000

Table 12 各ストレス因子に対する各要因の規定力  
順位 (数字は順位を表す)

ストレス因子 規定要因	心理 ストレス	内部 役割 ストレス	外部 活動 ストレス	外部 対人 ストレス	経 済 ス ト レ ス	総 合 ス ト レ ス	合 計 ス ト レ ス
親類の援助	11	1	2	8	11	5	3
夫の理解	10	5	11	7	1	11	9
家族の結束度	8	4	4	1	2	1	1
夫婦の価値観一致	12	10	8	2	9	7	5
免疫性	3	6	6	6	8	8	6
母の性格	2	9	2	5	6	5	2
両親の平均年齢	9	11	1	10	4	2	11
家族規模	4	12	5	4	12	9	10
兄弟ストレス	1	8	10	7	5	12	7
重症度	4	2	9	12	10	2	8
社会的地位	4	3	12	3	3	4	4
障害者の学年	7	7	7	9	7	10	12

注：BETA値がほとんど同じ場合は、同順位にしてある。  
注：太字は圧倒的に高い順位を示す。

#### (4) 教育的リハビリテーションに与える家族ストレスの影響

教育的リハビリテーションの効果にストレス因子がどの程度影響を与えているかを検討した。各ストレスの得点の高、低により2グループを準備し、この2グループ間で教育的リハビリテーション効果すなわち、「学力」、「身辺処理能力」、「社会性」、「合計」の得点の差異(t検定)を見た。7個のストレスのうち、差異を示したのは、「外部活動ストレス」、「経済ストレス」及び「合計ストレス」に関してであり、他の4ストレスについては差異を示していない。差異を示した結果だけを示すと、Fig. 2～Fig. 4及びTable 13～Table 15のようになる。「外部活動ストレス」では、4個の教育内容全てに有意な差を示し、特に「社会性」については $P < 0.004$ と高水準で差を示している。「外部活動ストレス」の高い家族は、低い家族に比べ、教育的リハビリテーションの遅れている障害児・者を持つようである。「経済ストレス」では、「身辺処理能力」に $P < 0.023$ と高水準で差を示し、「学力」と「合計」にやや差を示し、「社会性」には差を示していない。「経済ストレス」の高い家族の障害児・者は教育的リハビリテーションの効果小さくしている。全てのストレスを合計した「合計ストレス」では、4個の教育的内容全てに有意差を示しているが、「合計」以外は統計的に高水準で保証していない。

Fig. 2 外部活動ストレスの高・低グループ間の教育効果の差異

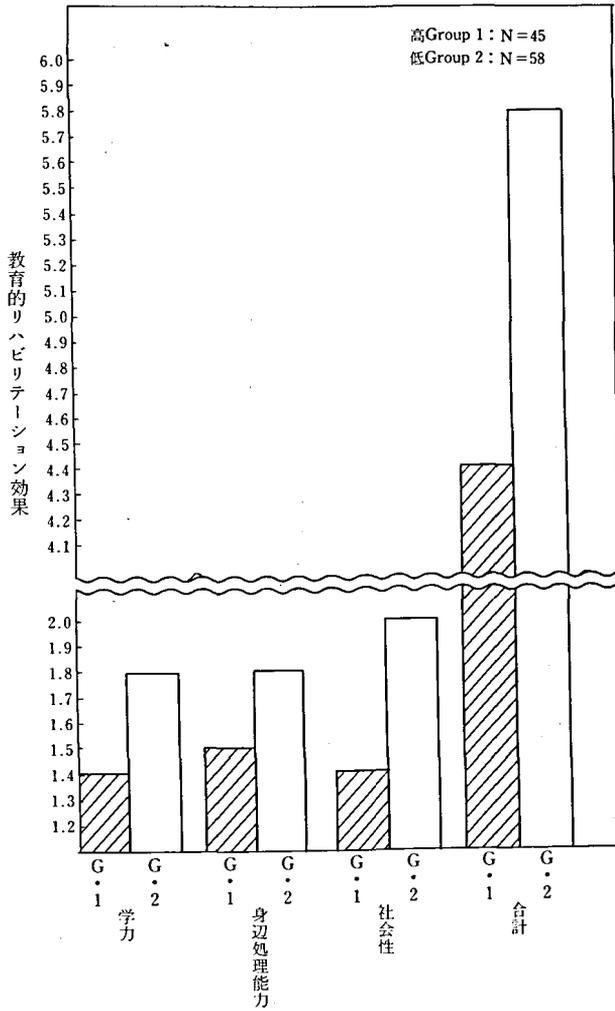


Table 13 Fig. 2 の t 検定の結果 (\*印はWelch 法による)

教育内容	グループ	N	M	S.D	誤差	F値	F値 有意水準	t 値	D.F	t 値 有意水準
学 力	GROUP 1	45	1.4667	0.894	0.133	1.29	0.379	-2.06	101	0.042
	GROUP 2	58	1.8621	1.017	0.133					
身辺処理 能 力	GROUP 1	45	1.5333	0.944	0.141	1.48	0.175	-1.72	101	0.089
	GROUP 2	58	1.8966	1.150	0.151					
社 会 性	GROUP 1	45	1.4667	0.894	0.133	1.79	0.046	-2.92	100.88	0.004 *
	GROUP 2	58	2.0690	1.197	0.157					
合 計	GROUP 1	45	4.4667	2.427	0.362	1.54	0.136	-2.47	101	0.015
	GROUP 2	58	5.8276	3.015	0.396					

Fig. 3 経済ストレスの高・低グループ間のストレスの差異

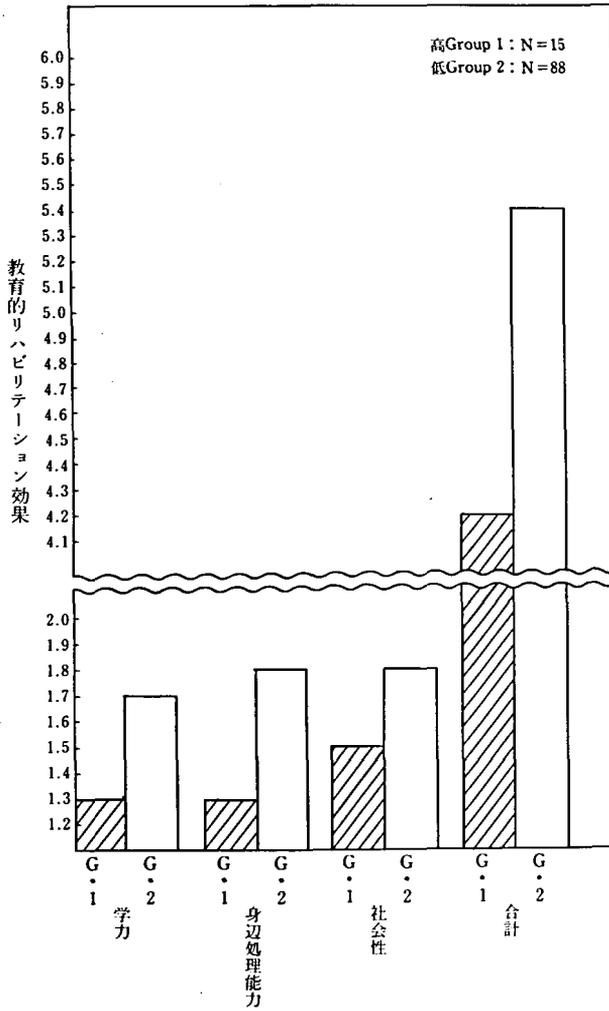


Table 14 Fig. 3 の t検定の結果 (\*印はWelch 法による)

教育内容	グループ	N	M	S. D	誤差	F値	F 値 有意水準	t 値	D. F	t 値 有意水準
学 力	GROUP 1	15	1.3333	0.816	0.211	1.49	0.407	-1.53	101	0.129
	GROUP 2	88	1.7500	0.997	0.106					
身辺処理 能 力	GROUP 1	15	1.3333	0.617	0.159	3.31	0.015	-2.38	32.59	0.023 *
	GROUP 2	88	1.8068	1.123	0.120					
社 会 性	GROUP 1	15	1.5333	0.834	0.215	1.90	0.176	-1.03	101	0.307
	GROUP 2	88	1.8523	1.150	0.123					
合 計	GROUP 1	15	4.2000	2.042	0.527	2.06	0.130	-1.53	101	0.129
	GROUP 2	88	5.4091	2.931	0.132					

Fig. 4 合計ストレスの高・低グループ間のストレスの差異

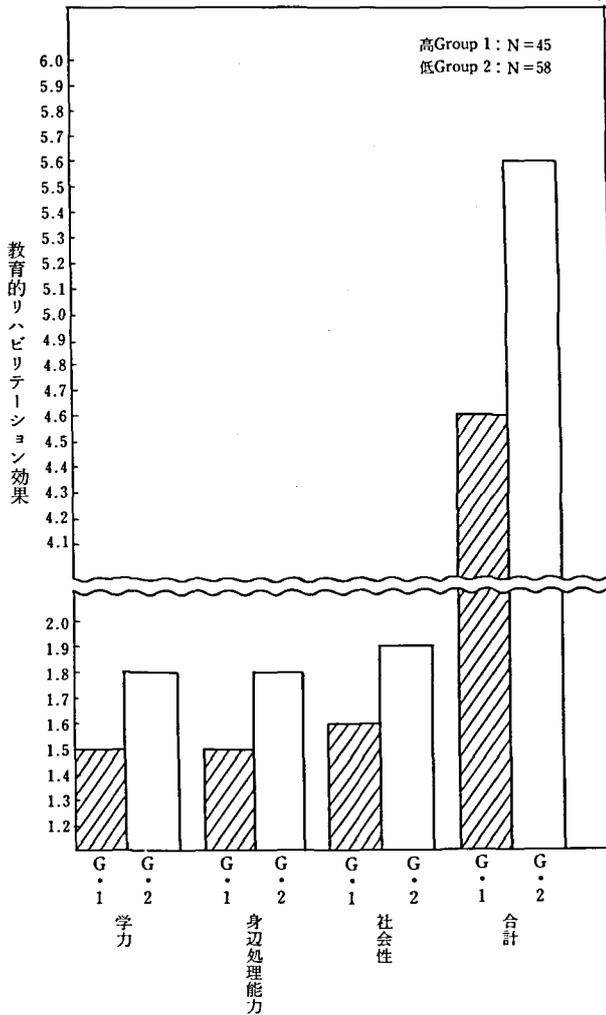


Table 15 Fig. 4 の t 検定の結果 (\*印はWelch 法による)

教育内容	グループ	N	M	S . D	誤差	F 値	F 値 有意水準	t 値	D . F	t 値 有意水準
学 力	GROUP 1	45	1.5111	0.815	0.122	1.75	0.056	-1.70	100.95	0.093 *
	GROUP 2	58	1.8276	1.078	0.142					
身辺処理 能 力	GROUP 1	45	1.5556	0.893	0.133	1.76	0.053	-1.58	100.93	0.117 *
	GROUP 2	58	1.8793	1.186	0.156					
社 会 性	GROUP 1	45	1.6000	0.963	0.144	1.55	0.132	-1.67	101	0.098
	GROUP 2	58	1.9655	1.199	0.157					
合 計	GROUP 1	45	4.6667	2.374	0.354	1.71	0.065	-1.86	100.98	0.066 *
	GROUP 2	58	5.6724	3.108	0.408					

## IV 考察

### (1) 社会的地位

社会的地位の高、低グループ間での各ストレスの量的な差異は、総計的には明確に現われなかった。しかし、中でも「外部対人ストレス」についてはやや差を示す傾向を見せている。筆者の過去の研究では初期には社会的地位の低い家族が高い家族よりも大きなストレスを示し、後期にその差は小さくなるという知見を得ていた。今回の結果ではこうした傾向は明確に現われていない。また、後期にストレスが大きくなる家族は社会的地位の高い家族に比較的多いという今までの知見は、今回の研究方法では確認できない。

今回の場合、「初期」が「小学部」であるが、今まで得た知見は初期を「障害児誕生から小学部入学頃」にした結果から得られているので予想に反してしまったようである。なお、初期は子供の障害を否定もしくは認めたがらない傾向があり、後期に社会的地位の高い家族が低い家族よりも大きいストレスを示す場合、それはその家族が子供に対して有している要求水準の高さとギャップによるものと解している。要求水準とのギャップは、世間に対する「恥」や世間からの「偏見」といった外部の人々との関係によるストレスを増大すると思われる。

しかし、社会的地位のストレスとの関係は、質的な分析、重回帰分析では明確に現われてくる。Table 12を見ると、社会的地位によるストレスの説明能力は、「合計ストレス」では12個の要因のうち第4番に示されているのである。「外部対人ストレス」だけでなく、「内部役割ストレス」と「経済ストレス」についても全要因中第3番目に位置しているのである。

### (2) 兄弟ストレス

兄弟ストレスの分析の意味は、「いったい、兄弟がいることは、障害児・者のいる家族にとってポジティブに作用するのかネガティブに作用するのか」という疑問から生じている。前回の報告では、つまり兄弟のいるグループは、兄弟のいないグループよりも「外部対人ストレス」と「心理ストレス」に関して各々 $P < 0.004$ 、 $P < 0.09$ の水準で

高いストレスを示し、今回では、つまり「兄弟ストレス」の高いグループがその他のグループよりも、2個のストレスに関して $P < 0.028$ 、 $P < 0.010$ の水準で高いストレスを示している。この点については両分析は同じ結果を示している。しかし、前回に有意差を示さなかった他の5個のストレスについて、今回は全てに有意差を示しているのである。すなわち、兄弟がいるかないかの区分、言い換えれば兄弟のいることが障害児・者のいる家族のストレスに何らか作用を及ぼすかどうかという仮説は、2個のストレスについてのみ受け入れられたが、他のストレスについては受け入れられなかった。そこで、兄弟のいることが家族にとってポジティブに作用する場合もあれば、ネガティブに作用する場合もあると解釈した。従って、今回の分析では、ネガティブに作用する家族、つまり「兄弟ストレス」の高い家族のグループと、ポジティブに作用する家族、つまり「兄弟ストレス」のないもしくは少い家族及び兄弟のいない家族のグループとの比較を行った。結果として、全てのストレスに差を示した。つまり、兄弟は障害児・者のいる家族にとって有利となることもあるが不利となることもあり、不利となる場合、家族のもつ種々なストレスを誘引し、増大させる作用もあることになる。「兄弟ストレス」を測定した変数は、両親が兄弟のめんどろを見れる程度、兄弟の精神的・情緒的变化、両親—兄弟関係の変化(甘える、過度に関心を引くなど)などから構成されているが、さらに兄弟の就職や結婚などを加えると、「兄弟ストレス」の作用は大きくなるかもしれない。質的な分析として重回帰分析を「兄弟の有無」について行ったが、やはり量的な分析と同じく「心理ストレス」の説明として1位の要因となっている。しかし、 $P < 0.004$ の有意差を示した「外部対人ストレス」では7位の要因となっている。「兄弟の有無」が全規定要因のうち一番「心理ストレス」をよく説明していることは注目に値する。母親にとって、「兄弟」は大きな負担となっている場合もあるようである。

### (3) 12個の規定要因とストレス因子との質的な分析

Table 12に示した重回帰分析のまとめにはい

くつかの注意が必要である。第一に、「夫の理解」と「家族の結束度」及び「母の性格」が少しではあるが重複していることである。本研究では行わなかったが、これらの重複している要因はひとつの規定因子としてまとめて分析すると、さらに明確な結果が出たであろう。重回帰分析では、要因間の内部相関が小さいほどよく、もしこれが高い場合、相関する要因同士が相殺されることもある。今回の分析では、その内部相関はそれ程大きくはない。「経済ストレス」を説明する要因の1位と2位が「夫の理解」と「家族の結束度」である。この2要因の単純相関は0.31261でやや高いので、両者は相互に増強し合ったのかあるいは重複しているにもかかわらず、1、2位という順位は余程両要因は説明力があるのか、今後さらにくわしく研究する必要がある。ただし、「両親の平均年齢」と「障害者の学年」は0.53635であるので注意を要する。「外部活動ストレス」を最もよく説明しているのは「両親の平均年齢」であり、「障害者の学年」は7位である。親の年齢が高くなると、外出しにくくなるのか、あるいは、障害者の年齢が高くなると外出させるのが大変になるのか解釈が難しい。ここでは、障害者の成長にともなう体重の増加や障害の進行に加え、体力の衰えてくる年配の両親にとっては、レジャーやレクリエーションのための外出は負担となってくると考える。

さて、前回の報告であまりストレスの規定要因としての作用が認められなかった要因のうち、「免疫性」と「夫婦の価値観一致」の2要因は、重回帰分析では、他の要因に比べかなりの説明力をもっていることが分かった。「免疫性」つまり、障害に関する知識を障害児誕生以前に有していることや障害者の友人、知人を有していることは、特に「心理ストレス」の大小をかなり予測している。「夫婦の価値観一致」は「外部対人ストレス」をよく説明している。

全体的にみて、「家族の結束度」、「母の性格」、「親類の援助」及び「社会的地位」がストレスを予測するのによい指標と言えよう。12要因で、およそ各ストレスの15%から30%の分散が説明(R SQUAREの数値)されているが、さらに、他の要因を入れてみる必要があるだろう。「心理ストレス」のR SQUAREが少ないのは分散がランダムでない

からであろう。障害児・者のいる家族のケース・ワークについては、まずこうした点に目をつけ、家族状況を分析することが重要である。また、治療する場合もこれらの点を課題とする必要があろう。

#### (4) 教育的リハビリテーションに与える家族ストレスの影響

「外部活動ストレス」の高い家族がその障害児の各教育内容を低く示す理由は様々に考えられる。例えば、「学力」や「身辺処理能力」が遅れている子供をとまなび外出しにくいとも考えられるし、外出して、外との経験や外部の人間との接触が少ければ子供の「社会性」は遅れるとも考えられる。しかし、一方、ここでの教育内容の達成度は一応その子供の障害の程度に比べてどうかを基準にしているので、子供の知的、身体的能力に関係なくストレスとの関係が現われているはずである。そう考えれば、外部での諸経験の程度がこれら教育的リハビリテーションの効果に影響を及ぼしていると考えられよう。しかし、ここでの諸結果についてのさらに深い検討は、他の機会に他の研究方法で確認すべきである。「経済ストレス」に関する教育的リハビリテーションの差は、明確に支持できない。「経済ストレス」を測定する項目が少く、回答にばらつきがあるからである。家族の経済的な地位が子供の教育的内容に何らかの影響を与えることはうなづけるが、ここでは早急に結論は出せない。ましてや、例えば、「身辺処理能力」を「経済ストレス」が直接作用しているとは考えられず、その間に何か介在する要因があるかもしれない。しかし、直接にせよ、間接にせよ、また、なぜそうであるのか明確ではないにせよ、各ストレスの大小は、何らかの理由で障害児・者の教育的リハビリテーションに影響を与えていることは確かである。Table 15はこのことをよく示している。ここに準備した6個のストレス全てと教育的リハビリテーションの効果は明らかに何らかの関係を示している。学校における教育は、子供個人に対してなされるばかりでなく、その家族にもなされるべきである。障害児・者の教育の場合にはなおさらその必要性は大きいであろう。

## V 結論

1. ストレスの量に関しては、「社会的地位」の上、下は差を示さないが、質的な関係では、特に「内部役割ストレス」、「外部対人ストレス」、「経済ストレス」をよく予測する指標である。
2. ストレスの量に関しては、すべてのストレスの種類に、「兄弟ストレス」は差を明確に示している。質的な関係では、特に「心理ストレス」を最もよく予測している。
3. 何らかの理由で、「経済ストレス」と「外部活動ストレス」の大小は、障害児・者の教育的リハビリテーションの効果と関係を有している。全ての種類のストレスの合計に関しても、その大小は教育的リハビリテーションの効果にかなり明確な関係を有している。
4. 12個の規定要因は、「両親の平均年齢」と「障害者の学年」が重複している。また、「夫の理解」に対して、「家族の結束度」と「母の性格」がやや重複しているがこれはあまり問題ではない。  
「内部役割ストレス」については、「親類の援助」がとびぬけてよく説明する。また「総合ストレス」については、「家族の結束度」がとびぬけてよく説明する。総じて、「家族の結束度」、「母の性格」、「親類の援助」、「社会的地位」、「夫婦の価値観一致」、「免疫性」等がストレスをよく説明する。

## 付記

本調査に御協力して下さった御家族のみなさん、養護学校の先生方、ゼミの学生諸君に心から感謝の意を表します。

## 参考文献

- 1) 橋本厚生 「障害児・者のいる家族の発達段階及びストレスの若干の規定要因に関する研究」 長野大学研究紀要 第3巻3, 4 合併号 1982年
- 2) 橋本厚生 「社会的ストレスから見た障害児・者のいる家族の家族発達段階とその関連要因についての研究」 長野大学研究紀要 第4巻1, 2号 1982年